

# 和歌山県の地震

第 2 8 卷 1 号  
令和 2 年 1 月

## 和歌山県の地震活動

震央分布図	・・・・・・・・ 1
断面図	・・・・・・・・ 2
概況	・・・・・・・・ 2
和歌山県で震度 1 以上を観測した地震及び震度一覧	・・・・・・・・ 3
震度分布図	・・・・・・・・ 3

## 地震メモ No. 314

南海トラフ地震関連解説情報 (令和 2 年 2 月 7 日)	・・・・・・・・ 6
長期評価による地震発生確率値の更新について	・・・・・・・・ 7

- \* この資料に使われている震源要素（北緯・東経）は、世界測地系に基づいています。
- \* この資料の地震の震源要素は暫定値を使用しています。震度データを含めて再調査した後、修正することがあります。
- \* 本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016 年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点(河原、熊野座)、米国大学間地震学研究連合(IRIS)の観測点(台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東)のデータを用いて作成しています。
- \* この資料に掲載した地図は、国土地理院の数値地図 25000(行政界・海岸線)を使用しています。

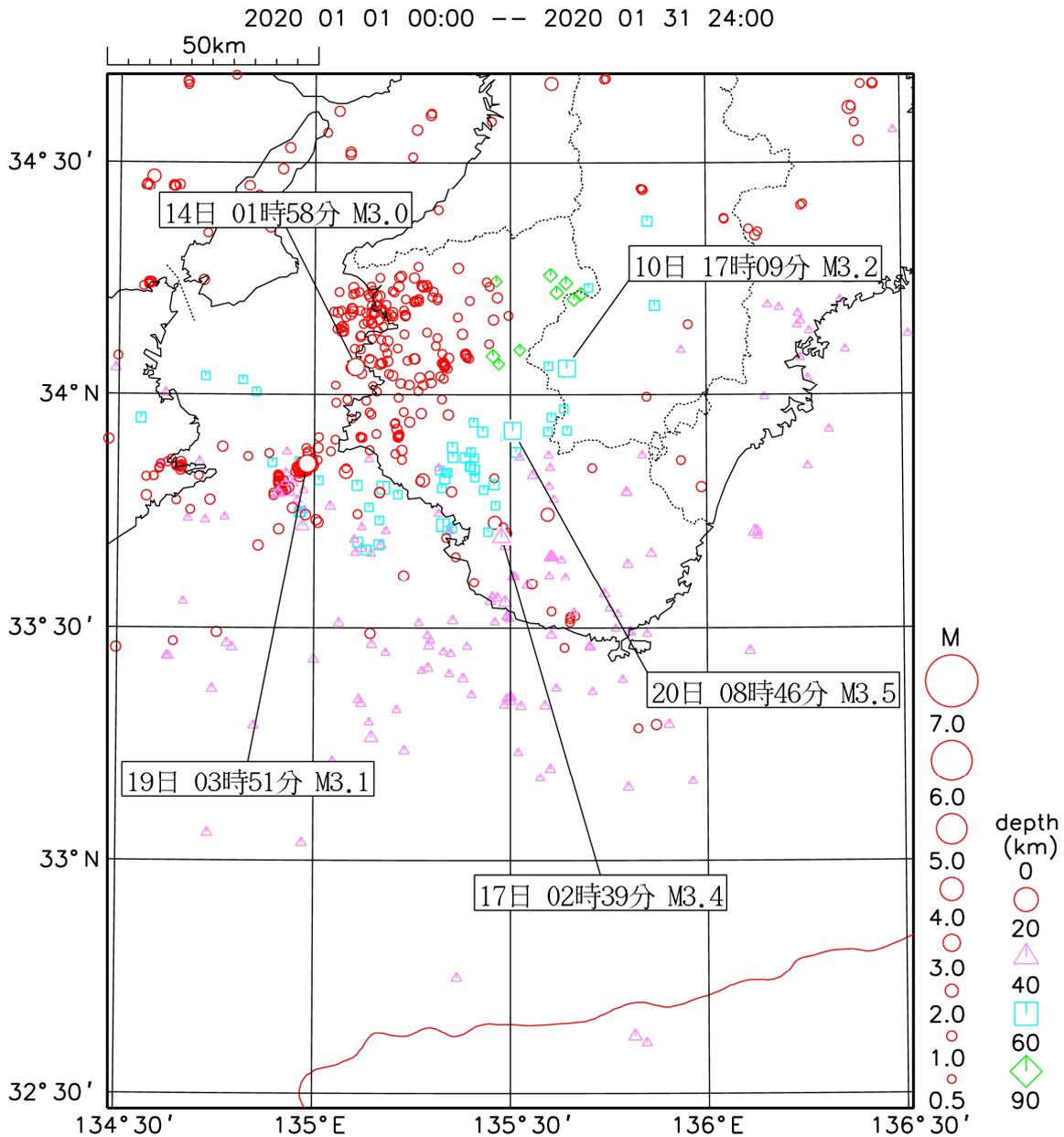
和歌山地方気象台

# 和歌山県の地震活動

2020年1月

和歌山地方気象台

## 震央分布図

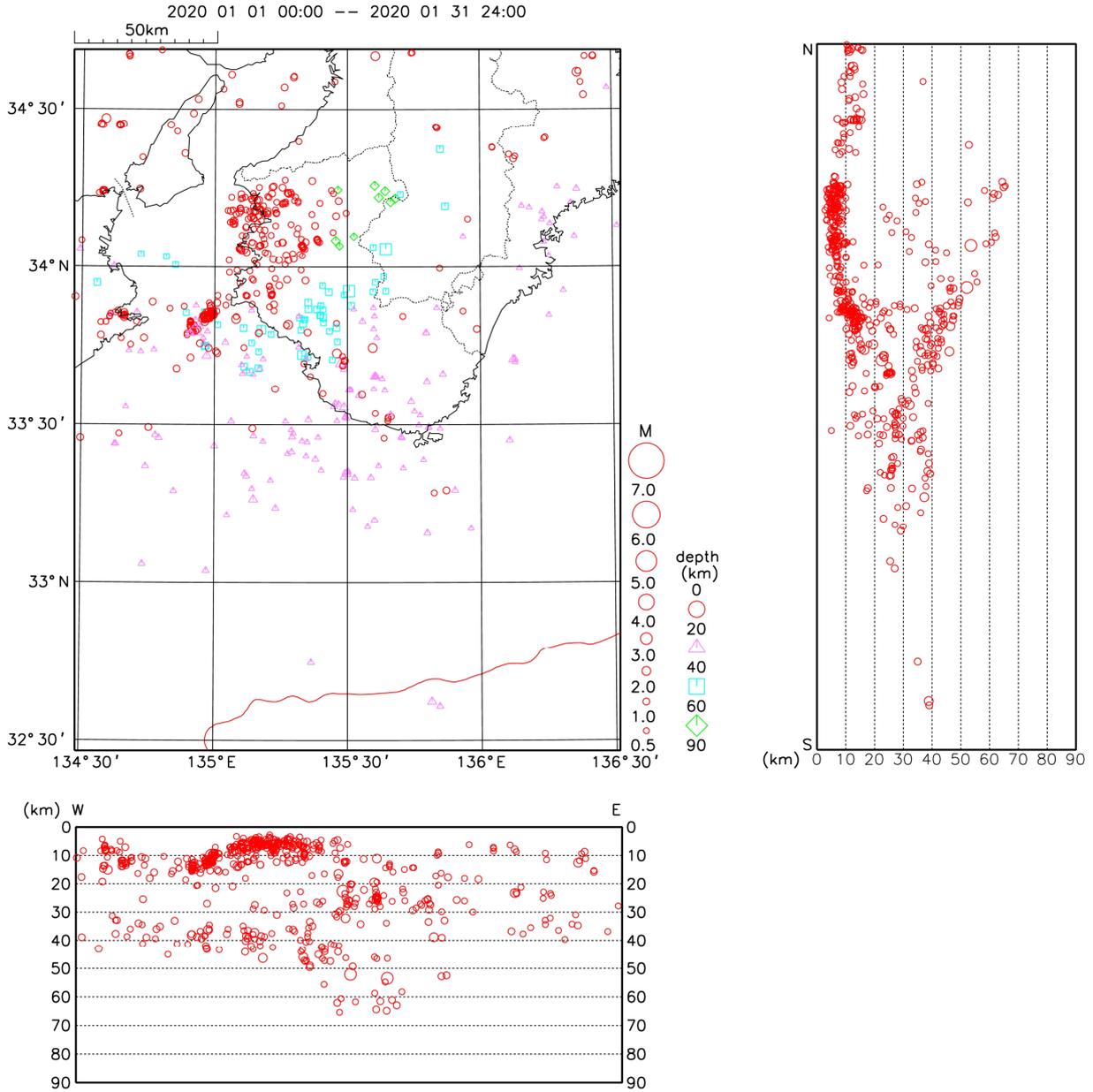


震央分布図は地震が発生した場所を地図上に描画したものです。

シンボルマークの大きさと地震の規模（マグニチュード）を、シンボルマークの形と色で震源の深さを表しています。また、赤線は海溝軸（南海トラフ）の位置です。

図中の吹き出しは、和歌山県内で震度1以上を観測した地震および震央分布図内で最も規模の大きな地震を示しています。

# 断面図



## 概況

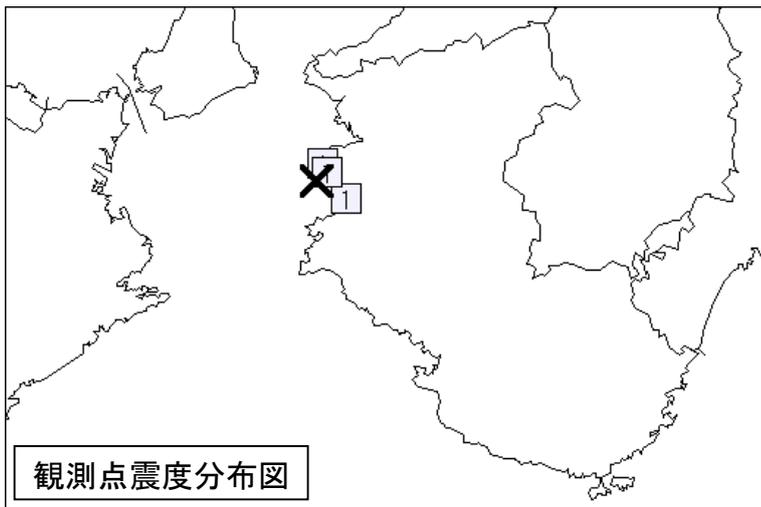
1月の震央分布図内で震源決定した地震のうち、マグニチュード(M)2.0以上の地震は23回(前月は28回)でした。そのうち最も規模の大きかった地震は、20日8時46分和歌山県南部の地震(M3.5、深さ52km)でした。この地震はフィリピン海プレート内部で発生した地震でした。

1月に和歌山県内で震度1以上を観測した地震は、5回(前月2回)でした。

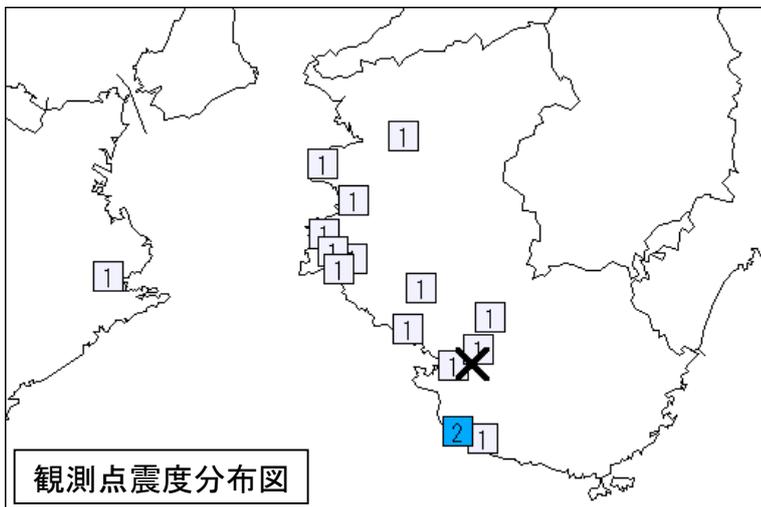


**震度分布図（図中の×は震央）**

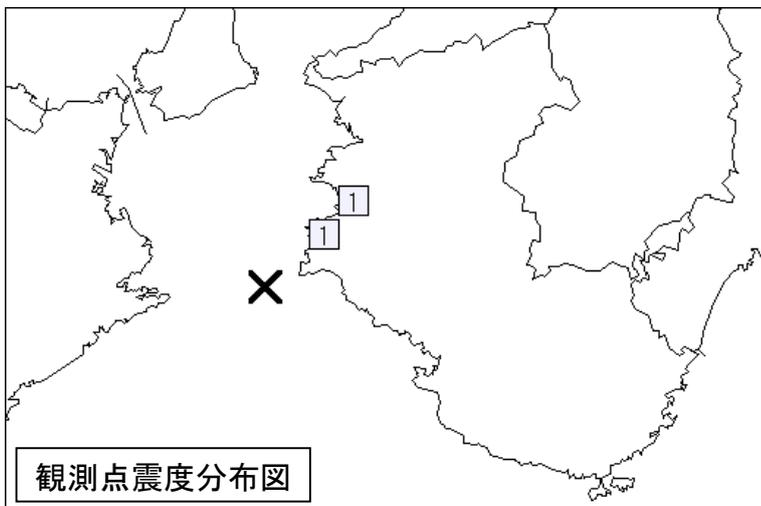
2020年01月14日01時58分 紀伊水道の地震(M3.0、深さ7km)



2020年01月17日02時39分 和歌山県南部の地震(M3.4、深さ23km)

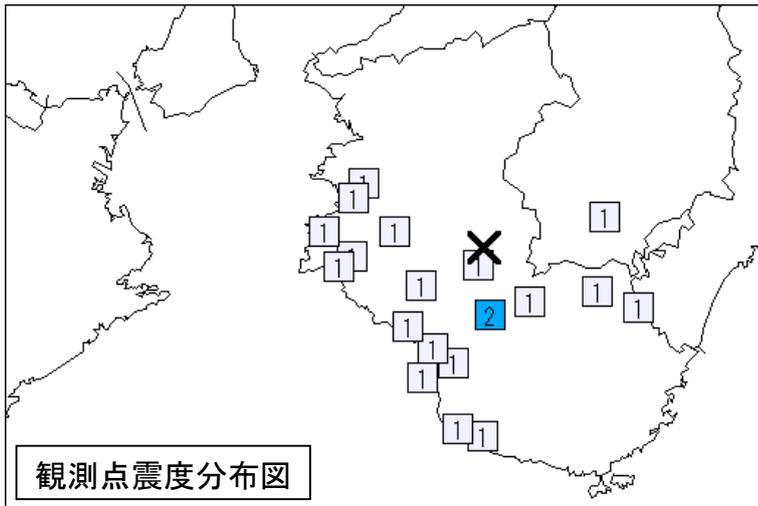


2020年01月19日03時51分 紀伊水道の地震(M3.1、深さ10km)



**震度分布図（図中の×は震央）**

2020年01月20日08時46分 和歌山県南部の地震(M3.5、深さ52km)



## 南海トラフ地震関連解説情報 (令和2年2月7日)

南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

### 1. 地震の観測状況

(顕著な地震活動に関する現象)

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

(ゆっくりすべりに関係する現象)

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震(微動)のうち、主なものは以下のとおりです。

- (1) 四国東部から中部：12月27日から1月9日
- (2) 東海：1月11日から14日

### 2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。また、周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られています。

2018年秋頃から四国西部のGNSS観測及びひずみ観測で観測されていた、それまでの傾向とは異なる地殻変動は、収束したとみられます。

GNSS観測によると、2019年4月頃から紀伊半島西部・四国東部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動を観測しています。

(長期的な地殻変動)

GNSS観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

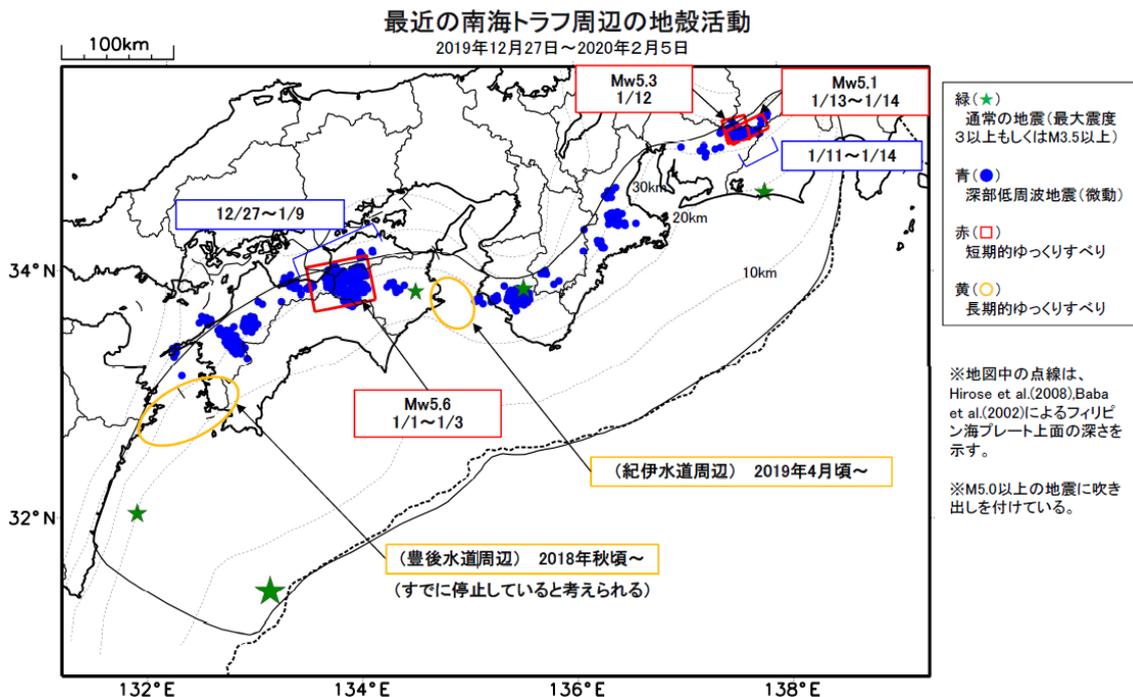


図 南海トラフ周辺の地殻活動をとまとめた図

この資料は、「南海トラフ地震関連情報」の普及を目的に、発表された『南海トラフ地震関連解説情報』の内容を抜粋、編集加工した概略を掲載しています。各観測状況の評価等、より詳細な事項等は以下 URL の資料をご覧ください。

- ・ 南海トラフ地震関連解説情報 <https://www.data.jma.go.jp/svd/eew/data/nteq/index.html>
- ・ 報道発表資料 <https://www.jma.go.jp/jma/index.html> ※新着情報をご覧ください

# 長期評価による地震発生確率値の更新について

地震調査研究推進本部地震調査委員会は、前回(2019年1月1日)から1年経過したことから、新たに『令和2年(2020年)1月1日を基準日として算定した地震の発生確率値』を公表しました。

本紙では、これらの公表資料から、和歌山県に大きな影響があると考えられる活断層(表1)および南海トラフの地震(表2)を抜粋し掲載します。前年の評価との変更箇所については、中央構造線断層帯(根来区間)では30年以内の地震発生確率、南海トラフの地震では経過率に変更されています。

その他の活断層等の資料やより詳細な事項は、地震調査研究推進本部(<https://www.jishin.go.jp/>)でご覧になれます。

これらの資料は、地震の危険性を再認識し防災意識を高めるとともに、今後の効果的な地震防災や対策を検討する上での基礎資料として活用ください。

また、日本ではどの場所でも、地震による強い揺れに襲われることがありますので、ランク分けにかかわらず日頃からの地震に対する備えも重要です。

表1 和歌山県に大きな影響があることが考えられる活断層

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で予想した地震規模 (マグニチュード)	活断層における相対的評価		地震発生確率 30年以内	地震後経過率
		ランク	色		
中央構造線断層帯 (金剛山地東縁区間)	6.8程度	Zランク		ほぼ0%	0.2-0.3
中央構造線断層帯 (五条谷区間)	7.3程度	Xランク		不明	不明
中央構造線断層帯 (根来区間)	7.2程度	Aランク		0.008%~0.3%	0.4-0.6
中央構造線断層帯 (紀淡海峡-鳴門海峡区間)	7.5程度	A*ランク		0.005%~1%	0.4-0.8

活断層で発生する地震における相対的評価の凡例

色	ランク	解説
赤	Sランク(高い)	30年以内の地震発生確率が3%以上
黄	Aランク(やや高い)	30年以内の地震発生確率が0.1~3%未満
白	Zランク	30年以内の地震発生確率が0.1%未満
黒	Xランク	地震発生確率が不明(過去の地震データが少ないため、確率の評価が困難)

地震後経過率が0.7以上である活断層については、ランクに\*を付記する

表2 南海トラフの地震

長期評価で予想した地震規模 (マグニチュード)	海溝型地震の相対的評価		地震発生確率			地震後経過率
	ランク	色	10年以内	30年以内	50年以内	
8~9クラス	III*ランク		30%程度	70%~80%	90%程度もしくはそれ以上	0.84

海溝型地震における相対的評価の凡例

色	ランク	解説
赤	IIIランク(高い)	30年以内の地震発生確率が26%以上
黄	IIランク(やや高い)	30年以内の地震発生確率が3~26%未満
白	Iランク	30年以内の地震発生確率が3%未満
黒	Xランク	地震発生確率が不明(過去の地震データが少ないため、確率の評価が困難)

地震後経過率が0.7以上である海溝型地震については、ランクに\*を付記する